付載１　岸和田藩筆頭家老中家の系譜

山中吾朗(岸和田市教育委員会郷土史資料室)

今次の発掘調査地は、平成８年度調査地と同じく、江戸時代には岸和田藩筆頭家老中家の屋敷が存在したと推定されている区域にあたる。中家は、江戸時代を通じて、岸和田藩の筆頭家老職を代々勤め、その禄高は1500石であった。次席家老久野(くの)家が1300石を与えられたが、その次の高禄者は550石であり、中家は久野家とともに、家臣の中では一頭抜けた高禄を給せられていた。

こうした理由で、筆者は調査担当者とともに岸和田市下松町在住の川村(中)登美子氏宅を訪問し、中家伝来資料を調査させていただいた。藩政資料等は散逸してしまったようだが、中家系譜資料４点と、元文４(1739)年、藩主岡部長富(長著(ながあきら))が葛城山頂の高鼉(たかおがみ)神社(八大竜王社)に奉納した石鳥居銘の写し１点が伝えられていた（図版10ｄ）。これらのうち、葛城山頂の鳥居の銘文が中家に伝わるのは、正保２(1645)年に中次俊が同社の石祠を寄進した由緒によると思われる(岸和田市教育委員会『葛城峰宝仙山萬覚書』)。それ以外はいずれも中家の系譜資料であるが、これまで不明であった歴代筆頭家老の実名が確かめられ、その出自も一定度明らかにすることができた。以下、これらの資料によって中家の系譜をたどることにする。

中家系図は２本伝わる。１本(系図Ａとする)は藤原鎌足から、寛延２(1749)年に没した中頼恒までの系図で、楷書で丁寧に記されたものである（図版９）。もう１本(系図Ｂとする)は、戦国期の頼郷から頼業(幕末頃の人物と思われる)までを記し、文字はややくずした草書体で、人名を結ぶ朱線もフリーハンドで引かれているなど系図Ａに比べて粗雑で、草稿と思われる（図版10a～c)。しかし、系図Ｂは幕末期まで記載されているので、系図Ａ以後の人名が知れる。Ａ・Ｂを比較すると、人名に若干の異同もある。系図Ａ・Ｂの成立年代は、ともに全巻通じて同筆で記されており、後筆は認められないので、おおよそ各系図の最後に記された人物が生存した時期と考

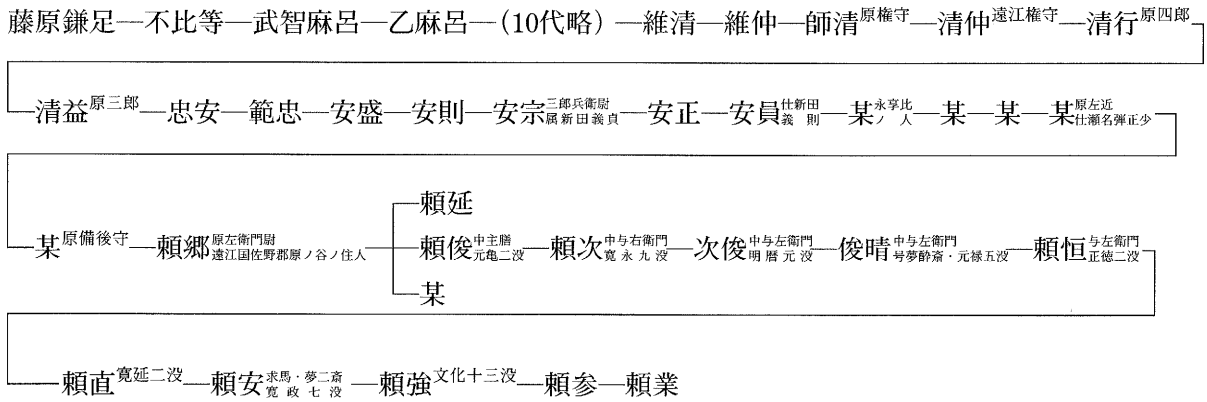

図25　中家系図

えてよいだろう。すなわち系図Aは江戸中期(18世紀前半頃)、Bは幕末期頃の成立と推測される。料紙や書風もそのように考えて特に違和感がない。系図の他に、織豊期〜江戸初期の中頼次とその子次俊の事績を記した「覚」1通と、「御先祖御法号」と表紙に記された法名書(横半帳)1冊がある。「覚」の内容は頼次については系図Aの頼次の個所にほぼ同内容が記されているが、次俊(Aでは俊次となっている)については系図にその事績についての記載がない。「御先祖御法号」は戦国末期の頼郷から頼強(文化13<1816>年没)までの各代、および妻子の法名や没年を記す。このように「覚」・「御先祖御法号」は系図の内容を補ってくれる。図25は、これらの史料によって作成した略系図である。

中家は、南家藤原氏の一流(工藤流)で、もと遠江国原村を本貫として原氏を称し、南北朝期には新田義貞、同義則に仕え、室町・戦国期には、原左近が今川家臣瀬名氏に仕えたという。

遠江国原村は、「和名抄」にみえる佐野郡幡羅郷のことで、現在の静岡県掛川市の北西部に位置する。中世の原氏は、法金剛院領(後、最勝光院領、鎌倉末期以後は東寺領)原田荘の地頭職に任じられ、原田荘の有力な在地領主であった。一族は、寺田・孕石・向笠・天方氏など原田荘およびその周辺を名字の地とする諸家に分かれ、室町期には遠江国中部の国人衆の中心的存在であった(『静岡県の地名』平凡社)。原氏は応仁・文明の乱前後の時期には、遠江国が斯波氏領国であったにもかかわらず今川氏に属していたが、15世紀末、今川氏が遠江へ勢力を伸ばし始めると反今川氏の立場をとった。原氏の拠った殿谷城(掛川市本郷)は、明応3(1494)年に今川軍の先鋒であった北条早雲に攻め落とされ、以後、原氏は没落したという(『掛川市史　上巻』)。

さて、系図Aの範忠までの記載は、『尊卑分脈』の記載と一致している。これまで原氏系図は①掛川市春林院所蔵「原氏系譜」(明治期)、②神戸市孕石家所蔵「原・孕石系図」(天文12年)、③小山町孕石家所蔵「孕石氏系図」(江戸中期)の3種が確認されている(『静岡県史　通史編2中世』)。①は範忠までは『尊卑分脈』および中家系図と同じで、範忠の子を忠泰とし、以後6代を経て、頼郷・頼延へと続く。②は①で範忠の子とされる忠泰以後の系図であるが、頼郷・頼延までの人名は①ともかなり異なっている。③は南家藤原氏二階堂流とし、忠泰以下は②と同じである。このように、中家系図は、範忠までは、『尊卑分脈』を写したとも考えられるが、それ以後はこれまで知られているどの原氏系図とも異なり、戦国期の頼郷・頼延で再び一致する。おそらく、これらの諸種の原氏系図は、範忠までは『尊卑分脈』に基づいて作成され、以後は分立した諸家が、各々惣領家に結びつくように作られた系図と見るべきであろう。戦国期の頼郷・頼延が諸本で一致するのは、この二人が戦国期に紛れもなく実在したためと考えられる。

頼郷は、「御先祖御法号」によれば、遠州原野谷の高富士(高藤＝殿谷)城主で、約18万石を領し、春窓比丘尼の菩提所として同所に春林院を建立した旨が記載されている。果たして頼郷が高藤城主であったのか、またその石高表記についても疑問が残るが、春林院は掛川市吉岡に現存する曹洞宗寺院で、天文4(1535)年に原頼郷が一族の春窓尼菩提のために建立したと伝えられる。

春林院には、天文23年2月5日付で頼郷が春林院に寺地を寄進した寄進状などの史料が伝わ

り、原頼郷の実在は確実である。また、同院には永禄13年3月2日付で原頼延が春林院の寺領を安堵した文書も伝わり、頼延も実在した人物である。中家は頼延の弟頼俊の系統とされている。

中家系図によれば、頼郷の次男(系図Bでは頼延の子)頼俊は武勇に優れ、次男であるために「中殿」と呼ばれたことによって、以後、中氏を称するようになったという。中氏が岡部家臣となるのは、頼俊の子頼次の時からで、頼次は、永禄11(1570)年、14歳の時に岡部正綱に仕え、以後、天正10(1582)年織田・徳川軍による甲州攻め、同12年長久手合戦などで岡部正綱や長盛配下の武将として功名をあげた。岡部正綱は、永禄3年桶狭間合戦で今川義元が討たれて以後、斜陽化した今川家にあって最後まで今川家に忠節を尽くし、永禄11年武田信玄によって駿府城を攻撃された際も、奮闘する正綱に感心した信玄が、正綱を家臣に取り立てようと和睦を申し出たという。この武田氏による駿府城攻撃の時に、頼次は岡部家臣となったという。その後、岡部氏は武田家臣となったが、武田氏も、勝頼の代に織田・徳川軍の攻撃を受け、天正10年に滅亡する。次いで岡部氏は徳川家康の家臣となり、やがて近世譜代大名に成長する端緒を築いた(岸和田市立郷土資料館特別展図録『戦国武将岡部一族』参照)。

原氏はすでに述べたように、明応3年の北条早雲による遠江侵攻以後没落したとされているが、天文年間にはまだ春林院を建立しうる程度の勢力は維持していた。しかし、永禄3年3月16日今川義元判物(沼津市妙泉寺所蔵春林院文書)・同年9月21日今川氏真朱印状(春林院文書)等によれば、原頼郷は春林院からの借銭の返済が滞り、その猶予を今川義元・氏真に願い出たが、許されなかった。返済滞納の理由は頼郷の「困窮」のためという。結果、質入れした田地は春林院の所有となったようである。永禄期には原氏は借銭の返済がままならない状態にあった。原氏はすでに経済的に自立しえない状況にあったのである。こうした状況が、原氏から分立した中氏の岡部家臣化の一因であったとするならば、岡部家臣となった時期を永禄11年とする中家系譜の記載は、十分に蓋然性をもちうるものであろう。

ところで、岡部氏は、もと駿河国志太郡岡部郷(現、静岡県志太郡岡部町)を本貫とする鎌倉幕府御家人で、室町・戦国期には駿河・遠江・三河国守護今川氏の被官となった。やはり南家藤原氏の一流で、系図の上では中氏と祖先を同じくする。中家が後に岸和田藩筆頭家老として厚遇さ

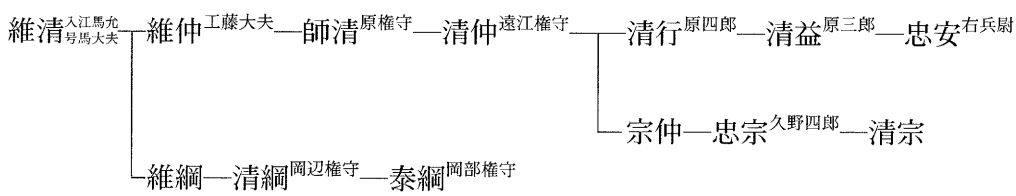

図26　岡部・原・久野氏略系図（『尊卑分脈』より）

れる理由もこのあたりにあるのかもしれない。ちなみに、次席家老久野氏については、「岸和田藩岡部家御代々御家人帳」(鬼洞文庫蔵、『和泉志』２号、以後「御家人帳」と略記する)によれば、久野覚之助は、もと今川家臣朝比奈駿河守(信置か)の家臣で、朝比奈家が断絶したために、岡部長盛が丹波国福知山城主であった時期に岡部家に客人分として召抱えられたというので、久野氏も今川家中に出自をもつ。今川家臣団の中に遠江国久野城(袋井市鷲巣)城主久野氏がおり、岸和田の久野家は久野城主の一族であったと思われるが、『尊卑分脈』によれば久野氏も南家藤原氏の流れを汲む一族であった(図26)。すなわち、岸和田藩筆頭家老と次席家老は、ともに系図の上では藩主と同族であったということになる。

さて、岡部家と中家との主従関係は、系図Ａでは永禄11年以後一貫して岡部家臣であったように記すが、系図Ｂの頼次の項に「永録(ママ)年中始テ岡部正綱公ニ仕、子細有テ鳥井左京進(亮)殿へ退去ス、乍去主恩ヲ忘ニ不忍、一子主膳次俊ヲ残シ置」とあり、頼次は後に鳥居忠政に仕え、子次俊は岡部家に残されたという。一方、「御家人帳」によれば、中氏は本来、徳川家康の重臣鳥居元忠の家臣であったが、一時期岡部長盛の家臣となり、更に長盛が丹波亀山城主の時に鳥居家へ帰参し、その後再び岡部家臣となったというので、中氏が一時期、鳥居家に仕えたことは事実のようである。長盛が亀山城主であったのは慶長14(1609)年８月から元和７(1621)年８月までであるから、「御家人帳」の記載が正確なものだとすれば、大坂の陣前後の時期に中氏は岡部家臣→鳥居家臣→岡部家臣と主家を移動したことになる。一方、中家の「覚」では中次俊は大坂冬の陣(慶長19年)の折には岡部宣勝の御供として天満口に在陣したという。これらの記述がともに事実であるとするならば、慶長14年８月以後に鳥居家臣となった中氏は、慶長19年までに岡部家に帰参していたということになるが、なぜこのような複雑な経緯をたどったのか、不明である。ただし、その後の岸和田藩での筆頭家老という厚遇を考慮すれば、鳥居家への一時帰参は決して主君岡部氏の意に反する行動ではなかったであろうと推測される。

こうして次俊以後、中家は代々岸和田藩筆頭家老を勤め、岸和田城本丸内の一画に広大な屋敷地を構えるようになった。

(追記)本稿執筆にあたり、藤枝市郷土博物館学芸員磯部武男氏より資料提供などの便宜を図っていただいた。末尾ながら御礼申し上げる。